

2017年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業

福島県二本松市東和地区西谷集落 実態調査報告書



2018年2月

国土舘大学文学部史学地理学科 地理・環境コース

宮地ゼミナール

目 次

1. はじめに	3
2. 「大学生の力を活用した集落復興支援事業」実施の経緯	4
1) 宮地ゼミナールと西谷集落との関わりの歴史	4
2) 事業参画の背景	7
3. 2017年度「国士舘大学西谷学校」の活動内容	9
1) 5月の活動－ご祈祷祭、田植え、東和地区の視察－	9
2) 7月の活動－草取り、草刈り、東和ロードレース大会への参加	12
3) 8月の活動－草刈り、夏祭りへの参加－	13
4) 9月の活動－稲刈り、「西谷めしフェス」の開催－	15
5) 11月～12月の活動－学園祭での「福島の味」、LOHAS米の販売－	19
6) 2月の活動－事業報告会への参加、反省会・検討会の開催－	21
4. 交流の継続へ向けた課題と集落の新展開へ向けた提案	
－まとめにかえて－	23
謝辞	25
参考文献	26

1. はじめに

大学生の力を活用した地域づくり事業は、今日でこそ 20 を超える府県で実施されているものの、2009 年度から始まる福島県の取り組みは、全国的にみて早い時期から実施されてきたものである（諸橋、2017）。すでに多くの論者が「外部人材」を活用した地域づくり活動の重要性を指摘しているが、私たち大学生が地域に受け入れてもらいながら様々な活動を協働という形で行うことで、地域に何らかのプラスの影響を及ぼすことができるかが問われている。

私たち国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コース（2016 年度までは地理・環境専攻）の宮地ゼミナールは、農業地理学や農村地理学を学ぶゼミである。ゼミの主な活動として挙げられるのが、3 年次に行われる「地理学野外実習（C）」や卒業論文の作成へ向けたフィールドワークの実施と「中山間地域農業参画プロジェクト」である。前者は、3 年次に毎年 10 月下旬に 3 泊 4 日で実施される野外実習が「地理学野外実習 C」であり、全国各地の農村を研究対象として、農業や特産品開発、農村観光、地域づくり等の実態についてフィールドワークを行い、調査結果をレポートとしてまとめている。また、4 年次の卒業論文では、必ずしもフィールドワークが義務づけられているわけではないものの、卒業論文の 8 割から 9 割はいずれかの研究対象地域におけるフィールドワークを通して作成されている。これらは、いずれも必修科目として設置されており、単位を修得しなくてはならない。後者は、ゼミの 4 年生と 3 年生が共同で行うもので、後述する福島県二本松市東和地区にある西谷集落において農業体験や住民の皆さんとの交流活動を行う取り組みである。この取り組みは授業として実施されているものではなく、任意参加の取り組みである。したがって、ゼミ生の全員が参加するものではないが、宮地ゼミの歴代のゼミ生はこの取り組みに強い思いをもって参加してきた学生も少なくない。

今年度、私たちは初めて福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に申請し、採択をいただいた。本稿は、福島県の 2017 年度「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の活動報告である。本稿では、一年間の活動内容を通してみえてきた活動の意義や課題を考察するとともに、今後の集落の新たな展開へ向けたささやかな提言を試みる。

2. 「大学生の力を活用した集落復興支援事業」実施の経緯

1) 宮地ゼミナールと西谷集落との関わりの歴史

宮地ゼミと西谷集落との交流は 2009 年度から始まった。その背景には、ゼミ担当教員である宮地講師（当時）が、大学院生であった 1990 年代の後半に中山間地域における有機農業の実態調査で東和地区（1990 年代当時は安達郡東和町）をたびたび訪れていたことが関係している。この研究（論文は 2001 年に公表されている）は、特定の集落の農業を対象としたものではなかったものの、調査を通して当時の東和町における主要な生産者との縁が形づくられた。2008 年 10 月に実施された宮地ゼミの最初の野外実習は、二本松市東和地区で行われた。その際に、1990 年代に宮地講師が有機農業調査でお世話になった関係者との懇親会が開催され、そこで「ゼミとして東和地区の活性化に関わってもらいたい」との依頼が、生産者の一部から出された。

大学へ戻ったのち、当時の 3 年のゼミ生たちは、日本大学の水嶋ゼミナールで取り組まれていた富山県入善町での稲作体験の取り組みの事例なども参考にしながら、ゼミで農業や農村の体験学習を行うことを通して東和地区の住民と交流し、地域の活性化にながしかの役割を果たせないか、と話し合った。その結果、2009 年 4 月に学生たち数名が西谷集落の寄り合いに参加し、通年を通じた農業・農村体験の受け入れをお願いし、ゼミ生と住民との交流が始まった。最終的に西谷集落が交流の場となったのは、とくに学生たちとの交流を強く望む生産者がいたことによる。

西谷集落をはじめとする東和地区は、1980 年代後半以降、養蚕業の衰退、減反政策の強化と米価の下落、葉タバコ買い取り量の減少などから、耕作放棄地の拡大が顕著となっていた（宮地、2001・2008）。その一方で、市町村合併を契機に設立された NPO 法人（ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会）が、有機農業や特産品開発、ツーリズム、新規就農者や移住者の受け入れなど、多彩な取り組みを進めていた（宮地、2011a・2013b）。また、中山間地域等直接支払制度の交付金を活用して、農地の維持とともに新たな農業の展開を模索する地区も見られた（宮地、2011b）。東和地区は、中山間地域問題を学ぶゼミのフィールドとして適した地域なのであった。

西谷集落は、二本松市東和地区の南西部に位置する行政区である（図 1 参照）。総面積は約 231.3ha とされており、そのうち水田が約 25.9ha、畑が約 52.8ha、山林が約 116.1ha となっている。後述するように耕作放棄地が拡大傾向にあり、現状では約 23.7ha とされている（数値は、いずれも 2017 年 4 月現在）。人口は 134 人、住民の高齢化率は 33.6% となっている（2017 年 5 月 1 日現在：住

民基本台帳人口)。宮地ゼミでは、西谷集落での活動を「中山間地域農業参画プロジェクト」と称してきた。この名称には、中山間地域の農業を体験することで、農業の意義や厳しさを学ぶとともに、集落の皆さんとの協働作業を続けることで、将来的に西谷集落の農業や地域に新しい風を吹かせられればという願いが込められている。活動の拠点となる実習圃場は、当初、西谷集落の北側に広がる貝作と呼ばれる棚田地帯の2枚の水田（約12a）であった（図2参照）。



図1. 西谷集落の位置

現地での活動は、4月の中旬に種まきと苗床づくり、実習圃場の溝堀作業からはじまる。5月には、住吉神社でのご祈祷祭に参加し、今年一年の五穀豊穡を集落の皆さんとともに祈りした後、田植えの作業を行う。7月上旬に行われる東和ロードレース大会にあわせて、草取りや草刈り作業を行う。あわせて、地域の一大イベントであるロードレース大会の会場設営、前夜祭の手伝い、大会当日の給水作業の補助も担っている。2014年度からは、ゼミ内に元陸上競技部の学生が加わったことをきっかけに、毎年5~10名の学生がロードレース大会にランナーとしても参加している。8月中旬には、草刈り作業を行うとともに、集落の子ども会と連携して夏祭りへ参加している。流しそうめんやスイカ割り、花火などを子どもたちと一緒に楽しんでいる。9月下旬に稲刈りとなる。田植えや稲刈りは基本的に手作業での体験とし、集落の皆さんから作業の

方法を教えていただきながら、農作業を一つ一つ学んでいる。10月には精米作業を行った年もあるが（2009～2010年度）、震災後は二本松市内の業者へ作業を委託している。生産したお米は、11月に開催される国士舘大学の学園祭（楓門祭）などで販売してきた。最後に2月中旬に、当該年度の事業活動を報告し、事業内容の成果と課題を話し合い、あわせて次年度の活動計画を検討している。集落の皆さんは、国士舘大学の学生を受け入れる活動を「国士舘大学西谷学校」と称しており、私たち学生は毎回温かいもてなしをいただいている。

2011年3月の東日本大震災は、この取り組みに大きな影響を与えた。4月に予定していた種まき作業は、福島第一原子力発電所事故にともなう現地の混乱と作付け規制のなかで中止され、5月の田植えも実施できなかった。この間、学生たちからはメッセージカードが送られたが、空間線量の高さから現地に向かうことはできなかった。前年度の5月に阿武隈の里山の再生へ向けて取り組みを始めた原木しいたけ栽培となめこ栽培は、そのまま放棄せざるを得なくなった。しかし、西谷集落での活動に意義を感じ、何らかの支援をしたいという学生たちは、2011年9月に子ども会の夏祭りの開催を提案し、たくさんのプレゼントを用意して現地へ向かった。この時の交流会で挨拶に立ったSさんは「半年ぶりにむらに笑い声が響いた。学生の皆さんのお陰です。ありがとうございます。」と話された。地道な交流活動を続けてきたことが、お互いを思いあう関係になったことを示す言葉であったと思う。その後の2年間は、学生たちと集落の皆さんとで、集落内の空間線量調査を数回にわたって行い、学生たちが「空間線量マップ」を作成することで、地域の除染計画の策定に役立ててもらった。

2013年からは、農作業を再開させたいとする西谷集落の皆さんの意向を受けて、農業体験の活動を再開した。しかし、この頃から福島県産農産物に対する風評被害の影響もあって、農業の継続をあきらめる農家が増え始め、当初使用してきた貝作の水田の耕作放棄地が増加してきた。逆に、「水田は一杯あまっているから、もっと米作りをやってもらってもいいぞ」という声もあがり、2013年度から15年度にかけて実習圃場は3枚、作付け規模は19aにまで拡大した（図2参照）。しかし、2013年度以降、毎年のように実習圃場ではイノシシの被害がみられるようになった。これは、水田の周囲を電気柵で囲ってはいるものの、周囲の水田が荒廃し始め草刈りの作業が間に合わないことも多くなり、その結果として漏電が生じることが多くなったための被害とも考えられている。そこで、2016年度からは貝作での農作業をあきらめ、上寺の水田（11a）での活動へと実習圃場を移動した（図2参照）。同じころから、私たちの活動を支える農家の高齢化が進み、肉体的な負担も大きくなっているとのことで、4月の種まき、苗床づくり、育苗作業をJAに委託せざるを得ない状況も出てきた。

農作業を核にした交流活動も、大きな岐路に直面し始めている。



図 2. 「国士舘大学西谷学校」の実習圃場の変化

(地理院地図を編集)

注. 図中の凡例は次の通り。

赤枠：2009年度～2010年度、青枠：2013年度～2015年度、

黄枠：2016年度～

2) 事業参画の背景

2017年度に「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に申請することになった背景には、次の2点がある。

第1は、取り組みの担い手である学生の経済的負担の軽減である。前述した通り、西谷集落での活動はゼミの主要な活動ではあるものの、正規の授業として実施されているものではなく、参加はあくまで学生たちの意志による。毎年1月に実施しているこの取り組みの事業評価アンケートでは、この取り組みの意義とともに課題も多く指摘されている(宮地、2013a)。その一つが「経済的

負担の軽減」である。国士舘大学地理学教室では、野外実習の安全指針が明確に示されており、学外研修として実施する5月、9月、2月は公共交通機関で現地へ向かうことが求められている。東京都内から新幹線を利用して現地まで向かうと、約15,000円の交通費がかかることになる。これに現地での宿泊費や交流会費等を負担すると、1泊2日で約20,000円、2泊3日で約25,000円がかかることになる。

活動が始まった当初、西谷集落の方で県の補助事業（「地域づくり支援事業」：2010年度）の採択を得て、農業ボランティアとして学生たちの受け入れ体制を集落の方で採っていただいたこともある。また、2010年度以降は、国士舘大学地理学教室の専攻予算の中から、毎年20～40万円の幅で学生の交通費補助や引率教員の旅費を負担していただいている。こうした経済的支援は、この取り組みを続けていく大きな追い風になってきた。しかし、年間5～6回にわたって現地へ通う活動には、どうしてもこれらの支援金では足りず、学生たちの経済的負担も大きくなってしまった。2017年1月のゼミ内での検討会では、すでにある大学の経済的支援に加えて、県の補助事業に申請してみようという声があり、2017年度に初めてゼミナールとして県の補助事業を申請することになった。

第2は、「国士舘大学西谷学校」の活動がマンネリ化してきたことにある。ゼミ生は毎年少なからずメンバーが変わり、また2年間という限られた期間の中で多彩な体験をできるため、ある程度活動に新鮮さを感じ続けられるが、集落の皆さんは毎年同じような作業を学生たちに教える、交流するという行為に飽きがきていることも事実である。毎年2月に開催される活動報告会では、「正直、取り組みに新鮮さがない。」といった意見が出されている。一方で、「新しい取り組みをやりたいというわけでもない。何をやったらいいか、それは先生や学生たちから提案してほしい。」といった意見が出されたり、「同じ取り組みでやってくれたほうが、楽でいい。」という消極的な意見が出されたりもしている。交流が10年近く続いてきたこと自体はよいことであるものの、何か新しい取り組みを模索することが必要となってきた。これまでの「体験」と「交流」の活動を継続しつつも、その意義や価値を再検討し、地域づくりに必要な視点や具体的なアイデアを生み出したいと考えた。そこで、本事業を活用して西谷集落が直面する課題を整理する一方で、地域の魅力や資源を再度調査したうえで多世代にわたって取り組むことのできる地域づくりの方向性について検討・提案することを目的に、本事業への申請することになった。

3. 2017年度「国士舘大学西谷学校」の活動内容

1) 5月の活動—ご祈祷祭、田植え、東和地区の視察—

今年度の「国士舘大学西谷学校」も、5月3日の住吉神社のご祈祷祭から始まった。学生の参加者は21名、西谷集落の参加世帯は22世帯であった。住吉神社は、西谷集落の氏神神社であり、毎年5月3日に五穀豊穰をお祈りするご祈祷祭（春の例大祭）が行われる。2015年度からは学生代表もここで玉串奉奠をさせていただくようになり、学生みなで気持ちを合わせて作業の無事と実りの秋を迎えられるようにお祈りする（写真1）。ご祈祷祭終了後は、集落の皆さんの持ち寄ったお重をいただく（写真2）。最初の交流会が境内で行われる。こうした神事への参加自体が、私たち学生にとっては初めての体験であることが多く、新鮮な気分で参加した。



写真 1. ご祈祷祭の様子



写真 2. 西谷の皆さんとの交流会



写真 3. 西谷公会堂前に集合



写真 4. 「国士舘大学西谷学校」の先生は集落の皆さん

翌5月4日に、田植えを行った(写真3)。終日をかけて11aの水田に苗を植えていった。集落の皆さんも15世帯に加わっていただいた。中山間地域に位置する西谷集落の水田は、圃場整備が行われていない水田も多く、実習圃場となっている水田も水路を毎年掘りあげて耕作が可能となっている。「国士舘大学西谷学校」の先生は集落の皆さんであり、自らの経験の中で培われてきた農作業の技を私たちに教えていただいている(写真4)。作業の途中、地元新聞社の取材を受ける学生もあり(写真5)、この活動の歴史や意義を改めて感じることができた。そして夕方からは、恒例の「大交流会」が行われた(写真7)。バーベキューを楽しみながら、交流を深めた。私たち学生もここで自己紹介が求められた。一度で名前と顔を一致してもらうことは難しいが、それぞれ工夫ある紹介も行われた。集落の皆さんからも自己紹介があった。交流の機会をたくさん得て、いろいろ話ができる関係をつくりたいと感じた(写真8)。



写真5. 新聞記者の取材を受けるS君



写真6. 作業を終えて集合写真



写真7. 作業の後は大交流会！



写真8. 西谷の皆さんも自己紹介

最終日となった5月5日には、東和地区内の新しい産業づくり、地域づくりの取り組みを視察させていただいた。羽山果樹組合では、リンゴのジュース加工の取り組みについて話を伺うとともに、傾斜地に広がるリンゴ畑を見学させていただいた（写真9）。また、遠くに安達太良連峰を眺めながら、阿武隈高地の農村景観の美しさに感嘆の声が上がっていた（写真10）



写真 9. 羽山のリンゴ畑を見学



写真 10. 美しい農村景観を背景に

その後、ふくしま農家の夢ワイン株式会社と前述した NPO 法人ふくしま東和ふるさとづくり協議会を訪問し、ワイン産業の立ち上げと原料となるワイン用ブドウ栽培の生産の実態、NPO 法人による多様な地域づくり、産業づくりの取り組みについて話を伺った（写真 11、12）。震災の影響はあるものの、前向きな取り組みが進められていることに、大きな感銘を受けた。



写真 11. ワインの試飲



写真 12. NPO 法人でのヒアリング

2) 7月の活動ー草取り、草刈り、東和ロードレースへの参加ー

7月は、草取りと草刈りを目的に西谷集落で活動している。あわせて7月1週目の日曜日に開催される東和ロードレース大会の補助と参加も目的としている。今年度の参加者は15名であった。

7月1日の午前中は、ロードレース大会の会場設営をお手伝いした。48回目を迎えた東和ロードレース大会は、地元のいなほ陸友会が長く主催者となって開催されてきた手作り感のある大会である。現在は、二本松市教育委員会が主催者となっているが、陸友会メンバーも大会を側面から支えている。私たちも陸友会メンバーとともに会場設営や給水係を担当して大会運営を支えた。なお、男子7名は10kmの部に出場した。



写真 13. ロードレース大会
会場設営の様子



写真 14. 給水所の設置の様子

1日の午後は、実習圃場で草取りを行うとともに、貝作の棚田地帯の自己保全管理水田の草刈りをお手伝いした。今年は雑草の量が少なく、作業は比較的楽であった。一方で、草刈作業ではほぼ全員がはじめて草刈機での作業を体験し、農業をやっている気分になれた。



写真 15. 草取り作業 (1)



写真 16. 草取り作業 (2)

3) 8月の活動ー草刈り、夏祭りへの参加ー

8月は、出穂後の8月中旬に訪問している。2017年度の参加者は6名であった(写真17)。この時期、水田のなかの草取りは作業の必要性がほぼなく、また水田周りの畦畔の草刈りも場合によっては必要ない(むしろ、草を維持しておいた方が病虫害被害の予防につながる)。それゆえ、私たちの実習圃場の作業ではなく、西谷集落の中山間地域等直接支払制度の交付対象水田の管理作業をお手伝いした。自己保全管理とされている水田の草刈り作業のお手伝いをする事で、集落の水田景観の保全や獣害被害対策に小さな貢献とはいえ、役割を果たすことになる(写真18)。この作業のなかで、西谷集落における水田耕作が馬洗井川沿いの比較的平坦な水田を中心に継続しているものの、馬洗井川に注ぐ小規模な河川が形成する谷戸に位置する水田が放棄されている実態を確認できた。今後はどの水田を残していくことが、稲作を継続する農家にとって好ましいのか、集落全体で検討する必要があることを感じた。

また、この8月には毎年集落の子ども会が主催となった夏祭りが行われている。今年度も、われわれが訪問した8月19日の夕方から、恒例の流しそうめん、スイカ割り、花火大会が行われた(写真19・20)。子どもたちも含めて、集落の20世帯の住民が集まり盛り上がった。とくに花火大会は、例年、学生たちで購入していく市販の花火を使った小規模なものではなく、集落の皆さんが二本松市の補助金と集落住民等の寄付金を財源にして、本格的な打ち上げ花火大会を開催してくれた(写真21・22)。



写真17. 稲の生育状況を確認



写真18. 自己保全管理水田の管理作業



写真 19. 集落の子どもたちを含めた交流会



写真 20. 流しそうめんの様子

※そうめんのスライダ―は W さん手作り
必要なものを自分たちで作り出せる「技」
に感銘を受ける学生も多い。



写真 21. 夏の夜空にあがる打ち上げ花火

※今年は、大掛かりな花火大会でした。



写真 22. 花火に見入る参加者

※みんなで楽しいひと時を過ごします

4) 9月の活動ー稲刈り、「西谷めしフェス」の開催ー

稲刈りは年により天候によって前後するが、集落の皆さんが大事にしている秋のお彼岸中日を外した日程で行っている。今年度は、9月24日に行った。参加者は15名、西谷集落からは13世帯の参加を得た。田植えに比べて学生の参加人数が少なかったのは、4年生が卒業論文の作成へ向けて現地調査等に追われていたことが関わっている。

稲刈りは、昨年度まで2泊3日の日程で行っていたが、今年度は大学の学事日程の関係から1泊2日で行わざるを得なかった。そのため、本来であればすべて手作業で刈り取り作業を行うのだが、今回は二枚の水田のうち一枚をバインダーで刈り取ってもらった。

3年生は全員、手作業での稲刈りが初めての体験であり、集落の皆さんから稲の持ち方、鎌の使い方、刈り取った稲の取り扱い方、稲の束ね方などを教えてもらいながら作業をした(写真23、24)。また、稲を刈り取る作業と同時に束ねる作業も行う必要がある中で、学生たち同士で役割分担をしながら作業を進めていった(写真25)。



写真 23 (上). 稲刈りの方法の説明を

受ける



写真 24 (右). 鎌を使った稲刈り



写真 25 (左・右). お互いに協力しながら作業を進める



写真 26. 稲 12 株を残して作業終了
注. 宮城県大崎市鳴子盆地で取り組まれている「鳴子の米プロジェクト」を真似て、1人1日あたりの米の消費量分の稲を残して収穫に感謝する。



写真 27・28 (右上・右下).

はさ掛けされた稲

注. 天日干し乾燥させてから脱穀される。この時点では、10月の天候不順(長雨)は想定できなかった。

稲刈りを終えた翌日・9月25日には「西谷めしフェス」を行った。これは、西谷集落の皆さんが郷土料理として食している「西谷めし」を、われわれ学生たちと集落の皆さんと一緒に作り、食べながら楽しもうというイベントである。

この取り組みは、宮城県大崎市の鳴子盆地で取り組まれている「鳴子の米プロジェクト」をヒントにしている。このプロジェクトでは、鳴子盆地の農業および水田景観を守るために、地域の適性品種（耐冷品種の「東北181号」：のちの「ゆきむすび」）を栽培し、生産された米を一定の価格で（60キロあたり24,000円）で買い支える取り組みが進められてきた。米の商品価値を高めることで農家の生産意欲が高まるだけでなく、米の多様な食し方が地元の住民によって考案され、そのことがさらに米の販路拡大につながるとともに、地域に新たな活力が生まれてきたとされている（結城、2009）。

私たちは、西谷集落の農業もまた稲作を中心としており、農業の存続には米の商品価値を高めるための取り組みが必要であると考えた。集落の皆さんとともに地域で食されてきた伝統的な料理に光を当て、風土に根ざした食文化を見つめ直す取り組みをしたいと考えた。当初、鳴子のような多彩なおにぎりを作り食べる米食のイベントを考えましたが、西谷集落の皆さんの事前検討会で却下され（住民の中で、多様なおにぎりを考案するのは難しいとの判断ゆえ）、いかにんじん、煮しめ、ごぼうしり、そしておにぎりを作り、食べるイベントへと軌道修正した。



写真 29. お母さんたちと一緒に料理



写真 30. 主婦の「技」を学ぶ

当日は、日頃私たち学生の農業体験や集落の皆さんとの交流を支えていただいているお母さんたちと一緒に、前述した食事の準備を一緒に行った（写真 29・30・31）。その間、家庭ごとに異なる味のつけ方やレシピの違いなどが話題になりながら、準備が進んだ。普段、自ら料理を作らないような学生まで、お母さんたちの「技」を学んだ。あわせて、日頃の「国士舘大学西谷学校」での交流のあり方について、お母さんたち特有の見方があることも知ることができた。完成した郷土料理は全部で 7 種類にも及んだ（写真 32）。参加者で味の感想などを話しながらいちくいたいただいた（写真 33）。



写真 31. 男子学生も料理をしました！



写真 32. 完成した郷土料理



写真 33. 郷土料理をおいしく・楽しくいただきました

5) 11月～12月の活動ー学園祭での「福島の味」、LOHAS 米の販売ー

宮地ゼミは、今年度も国士館大学の学園祭（楓門祭）に参加（出店）した（写真 34）。本来であれば、学園祭において集落の皆さんと一緒に生産したお米（宮地ゼミの米は、LOHAS 米として販売してきた。西谷集落の生活スタイルが、健康的で環境に優しい、持続可能な生活スタイルであり続けてほしいという願いを込めてつけられた名称である。）を販売するところなのだが、今年度は稲を天日干し乾燥していた 10 月の天候が悪く、脱穀、粃摺り、精米の作業が大幅に遅れることになった。10 月下旬になってもまだ乾燥が不十分で、脱穀作業を遅らせるしかなかった。そのため、私たちは学園祭において自分たちで生産したお米の販売をあきらめ、「福島米」の販売支援を行うことに変更した（写真 35）。ブースには、ゼミで取り組んでいるこのプロジェクトの目的、内容について掲示をした（写真 36）。あわせて、例年西谷の皆さんが学園祭に参加いただいていたが、今回は 10 月末になっても稲刈り作業等の農作業が続いていたことから、学園祭への参加もかなわなかった。



写真 34. 学園祭・宮地ゼミブース



写真 35. 販売した「ふくしまい」

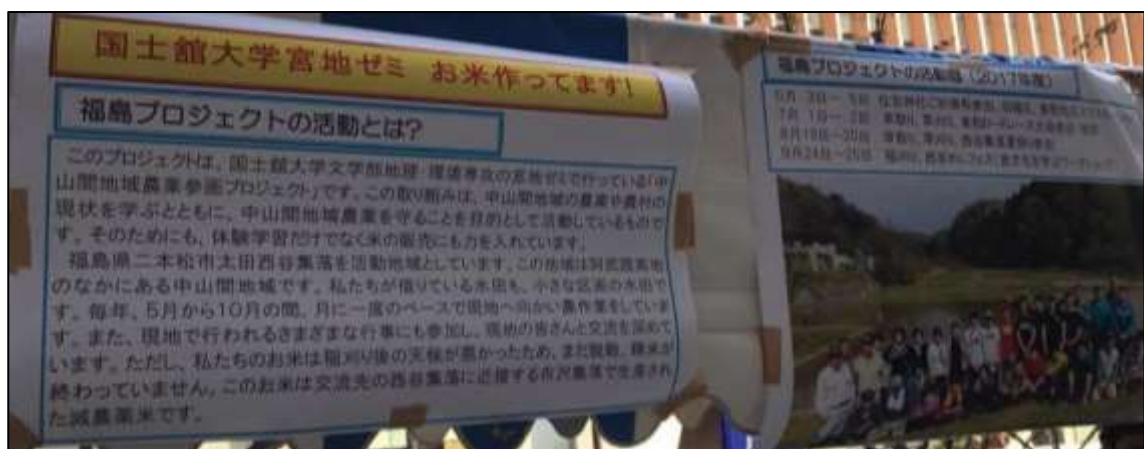


写真 36. ゼミのプロジェクトを紹介するポスターも掲示



写真 37. おにぎりを握る調理担当

いろいろ不安要素を残していたが、福島から 150kg の米を急遽調達し、それを焼きおにぎりとはら売りで販売することにした（写真 37）。福島の復興支援米（＝ふくしまい）として販売したが、2 日間の学園祭期間に完売することができた。

学園祭終了後の 11 月 7 日に、LOHAS 米の脱穀のめどがついたとの連絡を受けた。販売量は 330kg になりそうだとのことだったが、これを全量売するためのイベント参加は現実的ではなかった。そこで、急遽ゼミ内で検討会を開いた。必ずしも十分な意見が出たわけではなく、親戚や友人へ呼びかけようということになった。そんななか、3 年生のある学生が自身の Facebook で、LOHAS 米の販売について書き込んだ（図 3）。記事の書き込みのあった 11 月 10 日以降、買い取り注文が相次ぎ、11 月中にはほぼ完売の状態となった。販売先は、1 都 1 道 12 県の 61 世帯に及んだ（図 4）。過去にはない広域販売、販路拡大を実現できたと言える。

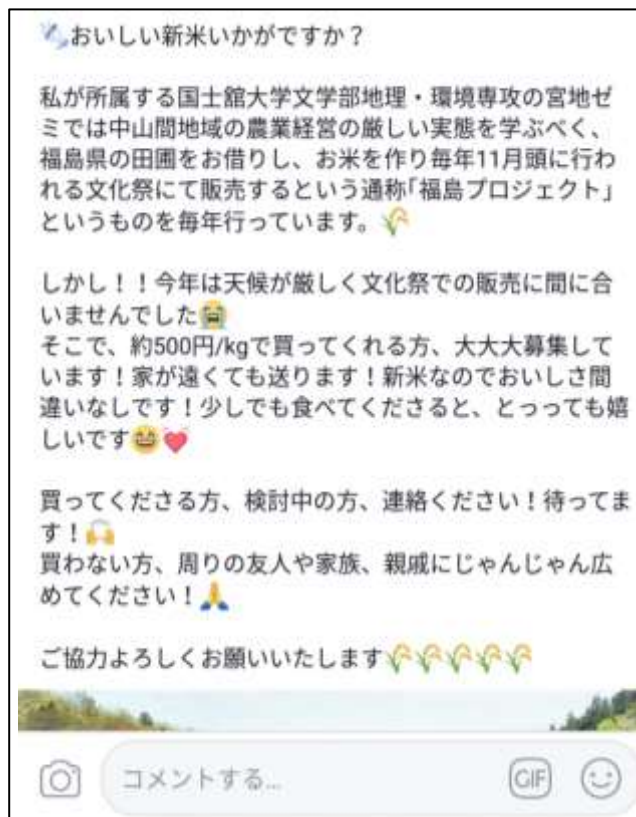


図 3 Facebook での米購入の呼びかけ
（A さんの Facebook より）

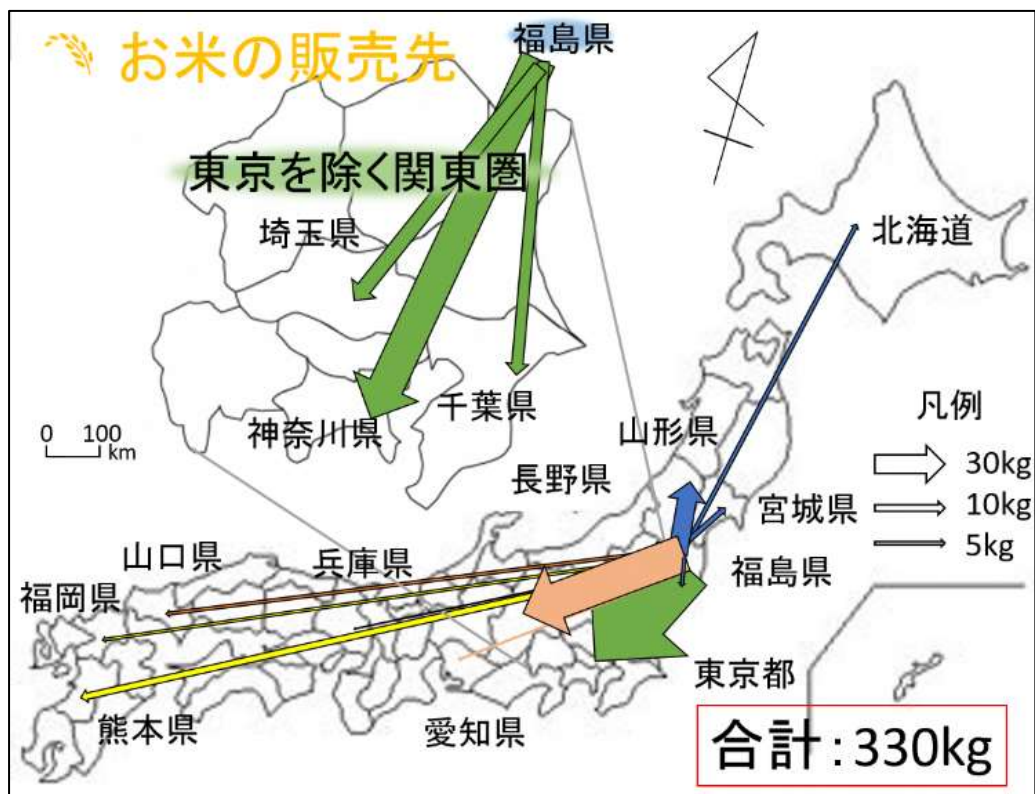


図 4. LOHAS 米の販売先（2017 年度）

（販売先原簿より作成）

6) 2月の活動－事業報告会への参加、反省会・検討会の開催－

今年度は、例年2月中下旬に行われている西谷集落での活動報告会・次年度検討会とともに、福島県が主催する「大学生等による地域創生推進事業報告会」にも参加した。

2018年2月9日の知事への活動報告会、翌10日の活動報告会（地域づくりオープンカフェ）では、ゼミの代表2名が一年間の活動内容と今後の取り組みの課題等について報告した（写真38）。交流を通じた地域づくりは、後述するような課題を抱えているように思われる。他大学や諸団体の活動報告も参考にしながら、今後の活動の方向性を再度検討する必要がある。当日は、応援学生4名とともに西谷集落からも4名の方々にご参加いただいた（写真39）。

翌週の2月17日には、西谷集落において活動報告会と次年度検討会が開催された。活動報告は、県の報告会の内容を改めて報告するとともに（写真40）、宮地准教授から取り組みの意義と課題について整理がなされた。当日は、恒例の年間活動内容を記録したアルバムが集落の代表者へ贈呈され、9年目の歴史が蓄積されることとなった（写真41）。

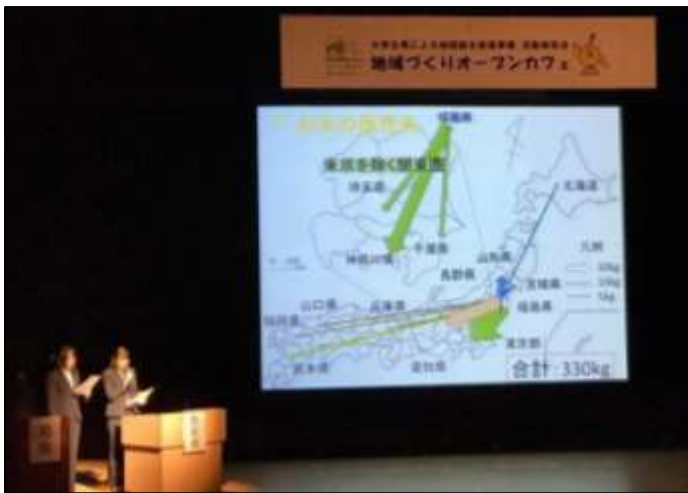


写真 38. 県の事業報告会での報告



写真 39. 西谷の皆さんとともに



写真 40. 西谷集落での報告会



写真 41. 9冊目のアルバム贈呈

4. 交流の継続へ向けた課題と集落の新展開へ向けた提案

－まとめにかえて－

福島県が実施している大学生と集落住民との交流事業は、全国的にみて先進的な事業であると言える。しかし、この事業が継続した交流を実現し、大学生等の外部人材を活用した地域づくりの展開になっているのかについては、改めて検証する必要があるのではないだろうか。

国土舘大学宮地ゼミは、二本松市東和地区西谷集落との交流を9年にわたって継続してきた。しかし、今日次のような課題に直面している。

第1は、交流を受け入れてきた世代の高齢化の進展と地域づくりに対する世代間の認識の差が大きいという課題である。このことは後掲する表1からもよみとれる。これまでの「国土舘大学西谷学校」の主たる担い手となってきたのは、現在の50歳代後半から70歳代半ばの世代である。これらの世代は、ほとんどが兼業農家の生産者であり、小規模とはいえ稲作を中心に営農活動を続けてきた生産者が多い。継続できる範囲で農業を続けながら、大学生の受け入れにも理解を示してきた世代でもある。また、集落側における大学生の実習圃場の管理等は、中山間地域等直接支払制度の交付金も活用しながら担われてきた。しかし、生産者の高齢化の進展と2020年に迫った次期の中山間地域等直接支払制度の活用に関わる検討が、生産者に難しい判断を迫っている。あわせて、次の世代(30歳代から40歳代)は上記世代と比較して格段に営農に対する意識は小さいと考えられる。中山間地域の農業や農地景観の保全という課題は、若手世代には必ずしも解決へ向けて検討すべき急務の課題と認識されていない。むしろ、農業生産や農地を活用する以外の地域活性化策を求めている声もある(次年度検討会での40歳代男性の発言)。西谷集落という農村集落であっても、農業が集落における生活のなかで、なくてはならないものではなくなりつつあるように感じる。こうした点は、単に大学生との交流継続ということではなく、交流を契機とした地域づくりのポイントに関わる認識のズレが生じることになる。ワークショップ等を通じた地域づくりの指針づくりが必要ではないだろうか。ただし、こうした会の開催も簡単とは言えない。

第2は、1つ目の課題と相反する内容だが、西谷集落の地域資源と考えられる里山の景観や集落の皆さんがもっている生産物を作り出す「技」の継承を、どのように実現するかという課題である。そのためにも、やはり小規模ながらも継承されている稲作を中心とした農業の存続可能性を見出していきたい。今年度、SNSによる農産物販売の可能性を感じる取り組みが実現できた。集落の

表1. 西谷集落での事業報告会・次年度検討会で出された交流事業に対する意見

内 容
・先生と学生たちがくるかぎり、交流できればよいと思う。(70歳代・男性)
・あと5年くらいはできると思う。でもその先はわからない。(70歳代・男性)
・先生が学生たちを体験させてほしいというから付き合っている。こちらは受け入れる側。70歳代・男性)
・せっかく仲良くなったのだから、できる限りお付き合いしたい。(60歳代・男性)
・国士館の学生たちがくることで、他の集落にはない賑わいがある。これはありがたいことだ。(60歳代・男性)
・中山間事業がなくなったら継続できるか、不安だ。(60歳代・男性)
・もっと前向きな意見をお互いに出し合いたい。待ちの姿勢ではダメだ。(60歳代・男性)
・学生たちが、作った料理をおいしい、おいしいと言って食べてくれるのが喜び。また来てほしいと思う。(60歳代・女性)
・いつまでこの取り組みが続くのかな？とは思ふ。まだやるのかい？と思うこともある。(60歳代・女性)
・時々孫も含めて学生や先生たちと遊べるのは楽しみでもある。できるところまで続けられればいい。(60歳代・女性)
・学生たちは、ここでいろいろな世代の人間と話をするから、きっと社会勉強になっているはずだ。それは貴重なこと。(60歳代・男性)
・もっと学生たちからもこうした、ああしたいという意見があってもよい。(50歳代・男性)
・一年間に10日くらい、学生や先生と付き合うくらいの交流がちょうどよい。(50歳代・男性)
・自分の家は、農業で生活しているわけではない。中山間事業が窓口だと、こういう交流事業に関わりにくい。(40歳代・男性)
・子どもたちや学生たちと一緒に、田植えや稲刈りはしてみたい気がする。教育的にも意味がありそう。(40歳代・男性)
・本気で農業をやろうとおもっているんですか？正直、農地の管理が大変で、農業に対して前向きな気持ちになれない。(40歳代・男性)
・もっと学生、先生とも交流を深めたい。そのなかで、何か新しい方向がみえるかもしれない。(40歳代・男性)

(資料)聞き取り調査

注. 複数回答可.

皆さんが生産した米も含めて、適正価格での販路開拓を実現できるよう、宮地ゼミの中でも検討を続けていきたい。前述した若手世代の中にも、「子どもと一緒に田んぼに入って、学生のみんなと一緒に稲作体験をしてみたい。」という指摘もある（次年度検討会での40歳代男性の発言）。SNSやこれまでの9年間の取り組みを通して固定客になりつつある東京都内のいくつかの米の販売先（や大学関係者）との関係性も維持しながら、西谷集落の農業生産の根幹を支える稲作の活性化を実現したい。また、今年度実施した「西谷めしフェス」で学んだ郷土料理も、商品化を実現できるような展開を模索したい。

第3は、地域の魅力を発見、活かせるような交流人口の輪の広がりが必要になりつつあるように思われる。宮地ゼミの卒業生は、すでに90名近くになる。西谷での思い出を大事にする卒業生も少なくない。また、LOHAS米を購入いただいた方のように、この事業に関心を（少なからず）もつ消費者もいることも分かってきた。小さな縁ではあるものの、西谷集落と宮地ゼミ、宮地ゼミの

活動を支援、理解する関係者とを結ぶことで、交流や地域づくりの新しい展開を一緒に考えてくれる人材が生まれてくるかもしれない。そうした新しい人の繋がり（交流人口の輪）をつくっていくことも必要ではないだろうか。

もともと、こうした様々な課題に対して、集落という単位だけで対応策がとれるかという点は難しい問題ではある。その点は、行政や NPO 法人などと連携しながら、対応策を検討する必要もあるだろう。

以上から、2017 年度の活動を通して、①世代を越えた地域づくりの方向性に関わる検討会の開催、②地域資源としての農産物およびその加工品の販売力強化、③交流人口の拡充、の 3 点を、集落へのささやかな提言として示すとともに、次年度の活動指針として定め、新たな地域づくりの展開へ結びつくような取り組みを進めていきたい。

〔謝辞〕

日ごろから大変お世話になっております西谷集落の皆様には厚く御礼申し上げます。特に今年度は、熊谷区長をはじめとする皆様には、福島県の事業申請にあたり、申請書の作成等の労をいただきました。今後も、地道ながらもお互いが納得のいく交流を続けさせていただきたいと考えております。この場を借りて御礼ともどもお願い申し上げます。

参考文献

- ・宮地忠幸 2001. 中山間地域における有機農業の展開とその意義－福島県安達郡東和町を事例として－. 人文地理 53-3 : 1-25.
- ・宮地忠幸 2008. 中山間地域農業の変容と振興課題－福島県阿武隈高地－. 水嶋一雄編『農業地域情報のアーカイブと地域づくり』成文堂、107-123.
- ・宮地忠幸 2011a. 中山間地域における特産品開発の地域的意義に関する一考察－阿武隈高地における桑の特産品開発を事例として－. 国士舘大学地理学報告 19 : 1-14.
- ・宮地忠幸 2011b. 中山間地域等直接支払制度の意義と制度的課題. 藤田佳久編『山村政策の展開と山村の変容』原書房、35-60.
- ・宮地忠幸 2013a. 大学生による体験を通じた農業・農村学習－2009・2010年の活動記録と事後評価－. 国士舘大学地理学報告 21 : 79-92.
- ・宮地忠幸 2013b. 阿武隈高地に広がる新たな地域づくりへの挑戦－東和地区・岩代地区の取り組みからみえること－. 地図中心 495 : 12-17.
- ・諸橋夏海 2017. 大学生の力を活用した地域づくり活動の展開とその意義. 2017年度国士舘大学文学部卒業論文、47p (未公表).
- ・結城登美雄 2009. 『地元学からの出発－この地域を生きた人々の声に耳を傾ける－』農文協.



活動の拠点施設・西谷公会堂
西谷集落では、国士舘大学との交流時に、
自作の「国士舘大学西谷学校」の看板と大学の旗が掲げられる。

2017年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業

国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コース

宮地ゼミナール

福島県二本松市東和地区西谷集落調査報告書（非売品）

発行年月日：2018年2月28日

編集・発行者：国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コース

宮地ゼミナール

〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1

電話・ファックス 03-5481-5278

e-mail

tmiyachi@kokushikan.ac.jp
